

マルコによる福音書14章54節 「遠くから付いて行く」

#### 1A イエスを諫めるペテロ

1B 御言葉への挑戦

2B 十字架の言葉

3B 思いのすれ違い

#### 2A 自己肯定をするペテロ

1B 警告の言葉の否定

2B 自分への誇り

#### 3A 眠っていたペテロ

1B 主との時間の欠如

2B 行いによる補足

#### 4A 遠くから付いて行くペテロ

1B 中途半端な献身

2B 敵の焚火

#### 5A 悔い改めの一步

### 本文

マルコによる福音書 14 章を開いてください。私たちは、受難の時節に入っています。4 月 21 日が復活祭ですが、その二日前、19 日に主が十字架に付けられることを思い起こします。ちょうど聖書通読の学びが受難に入っています。前週は、14 章の 31 節まで読みました。午後に 32 節から 14 章の最後まで読みたいと思います。今朝は其中で、54 節を中心にして「ペテロの衝撃」と名付けたらよいでしょうか、彼のイエス様を否む場面を見ていきたいと思います。「54 ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の庭の中にまで入って行った。そして、下役たちと一緒に座って、火に当たっていた。」

ペテロは、イエス様に対して最も偉大な告白をした人物です。「あなたは生ける神の御子キリストです。」と告白しました。イエスが、イスラエルの待ち望む救世主、キリストであられ、そして神ご自身を意味する御子であると告白したのです。しかし聖書は、その同じペテロが、「14:71 その人を知らない」と言いました。あれだけの信仰告白をした人が、知らないとまで言い切ってしまったほど、後ずさりしてしまったのです。事実、私たちの信仰生活、教会生活で残念なことにそういうことが起こります。あの時にあれだけの信仰告白をしていたのに、今は、まるで一度も信じたことのなかったような生活をしていることがあります。この世に生きているというのは、つまりきは避けられません。イエスを主と信じて受け入れることを、そのままイエス様との関係を生き活きとしたままで維持することは、並大抵のことではありません。ペテロの大きな信仰の後ずさりを通して、私たちは教

訓を学んでみたいと思います。

### 1A イエスを諷めるペテロ

ペテロは、主の言われることに聞き従ってきた人間です。けれども、福音書を読むと、ある時に、素直に聞き従わないどころか、イエス様に挑みかかったことがありました。その時から、少しずつその関係に距離が置かれてきました。イエス様が、「8:31 人の子が多く of 苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらなければならないと、弟子たちに教え始められた。」とあります。そうしたらペテロは、「8:32 イエスをわきにお連れして、いさめ始めた。」と言っています。イエス様がペテロを戒めたのではなく、ペテロがイエス様を諷めたのです。これは逆ですね、イエスが主であり、ペテロはこの方に聞き従い、また学ぶ弟子です。ここから、彼の信仰が後ずさりしていく始まりでした。

### 1B 御言葉への挑戦

状況がどんなであろうと、私たちは主の言われたことに聞き従うべきです。どんなに気持ちがついていかなくとも、考えがその命令に及ばなくとも、主が言われたことは、しかりなのです。この方の言われたことを、信仰をもって受け入れるべきなのです。私たちが、このようにして礼拝に集っています。また朝のデボーションで御言葉を聞きます。あるいはインターネットで、他の牧師さんの語る言葉を聞きますね。そして、その時に明らかに主が語っておられる言葉があります。ペテロと同じように、「そんなことがあってはなりません。」と挑みかかるならば、その時に信仰の後退が始まるのです。私たちはどんなに嫌だと思っても、「はい、わかりました」と受け入れるべきなのです。

### 2B 十字架の言葉

ペテロにとって、十字架の言葉がつかずきでした。彼は、イエス様が教会を、彼の信仰の上に立てるところまではしっかりと聞いていました。「マタ 16:18 あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」この言葉まではしっかりと聞いていたのです。けれども、これからイエス様がメシアとして、また神の子として世界を君臨し、またこのローマを倒さなければいけないのに、いきなり、ローマの十字架につけられる話をするのです。ローマの十字架は、ローマに反逆した者たちが無理やりその主権に従い、人々の見せしめにさせる処刑方法でした。その肉体的苦痛のみならず、卑しめられる精神的屈辱も味わうものでした。そんなはずはないはず！とペテロは思ったのです。

十字架のことばはつかずきになると、パウロも言っています( I コリ 1:23 等)。なぜならば、それはただ死を意味して、しかも無理やり死に至らせるものだからです。人は自分に何か良い物があると思いたいのです。何か改善できる可能性を見つけたい、自分の救いは自分の内になにか見つけられると思っています。それが「あなたにはない。あなたは罪の中で既に死んでいて、何もできないのだ。神の怒りを受けるだけなのだ。」と言われるのですから、「何を失礼なことを言うので

すか！あなたは、とんでもない人ですね。」となります。私とか他の人間が言ったら失礼ですが、全知全能の神が、完全に人生が倒産していることを宣言しておられるのです。しかし、「私にはできません」とするところに、信仰の後退があります。

### 3B 思いのすれ違い

こうして、ペテロや他の弟子たちと、イエス様の間には思いのすれ違いが起きました。それまでは心が全く一つであったのに、大きな距離ができてしまいました。弟子たちは、イエス様がなぜそんな十字架に付けられることを話しておられるのか、さっぱり分かりませんでした。その間に、自分たちが御国に近づいていると思って、イエス様の御座の右に、左に着こうと考えたりしました。誰が一番偉いのか？ということも議論しました。そして、イエス様は小さな子を祝福されようとしていたのに、それを妨げようとしようしました。イエス様は憤られましたね。さらに、前回は、非常に高価なナルド油を注いだマリアに対して、弟子たちは非常に怒りましたが、イエス様は、自分の埋葬のために前もって注いだのだ、彼女のことは福音が伝えられるところでは記念として語られる、とも話されました。両者の間に、思いのすれ違いが起きているのです。

### 2A 自己肯定をするペテロ

そしてイエス様は、過越の食事をされました。「あなたがたはみな、つまずきます。」と言われました。その時に、ペテロが強く反発したのです。「14:29 たとえ皆がつまずいても、私はつまずきません。」そして、イエス様は、「14:30 まことに、あなたに言います。まさに今夜、鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います。」と言われました。するとペテロは、「14:31 たとえ、一緒に死ななければならないとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」

### 1B 警告の言葉の否定

再び、ペテロはイエス様の言葉に強く否定しました。しかも、主ご自身よりも自分のほうが分かっているといわんばかりです。主が何か警告を与えておられる時には、「そういうことは大丈夫だ」と自分が思っている、聞き入れたほうがよいです。パウロが言いました、「I コリ 10:12 ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。」立っている思っている者です。

### 2B 自分への誇り

ここでペテロが犯した致命的な過ちは、「私はつまずきません」と自己肯定していることです。私はこうなんです！私は、こうやってきました。私は、こうしません。私が本当にそこまで、信用できるのでしょうか？しかも、彼は他の人々と比べて、自分は躓かないと断言しています。ここに、彼のうぬぼれがあった、人々への見下しがありました。しかし、自分がどれほど頼りない存在なのかを知らないといけません。イエス様は、「ヨハ 15:5 わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」自分を離れては、何もできないということ。これをペテロはこれから、実感します。私たちが信仰的に前進するのは、自分ができないということを悟ることです。私はやります、と、自己

肯定をしている時に、自分が何もできないことに盲目になってしまいます。

### 3A 眠っていたペテロ

#### 1B 主との時間の欠如

彼がどれだけ弱いか、次の行動を見れば分かります。イエス様がゲッセマネの園で、苦しみ悶えて祈られました。その時に、ペテロ、ヨハネ、ヤコブは眠ってしまっていました。イエス様は、「14:37 シモン、眠っているのですか。一時間でも、目を覚ましていられなかったのですか。」祈りがなくなってしまうていたのです。信仰生活が後退している時は、祈りの生活もなくなっています。自分であることが忙しくて、神の前で恵みと力を受けることができなくなります。そして、礼拝生活にも陰りが出て来ます。今日は雨が降っているな、じゃあ、やめておこうか・・・とか。また、聖書を読んでも、前に比べると喜びが無くなっているとか。けれども、イエス様を捨てることはないだろう、と思って呑気になっています。

#### 2B 行いによる補足

そして、イエス様を捕らえる者たちが来ました。その時に、ペテロは物理的な戦いに訴えました。「14:47 そばに立っていた一人が、剣を抜いて大祭司のしもべに切りかかり、その耳を切り落としました。」とあります。ヨハネの福音書には、この男がペテロであることが分かります。まだ、イエス様が捕えられるということ、受け入れられていなかったのです。こうやって、祈りが足りない中で起こることは、霊の戦いではなく、肉の戦いをしてしまうことです。あるいは言い換えれば、「何か自分がやることによって、神のために動いている」と思い込んでいることです。ペテロは、ただ祈っていてほしいとイエス様に言われたただけでした。ところが今、イエス様が捕えられないように、人の僕の耳たぶを切り落としてしまうのです。ルカの福音書では、イエス様はその人の耳をまた元に戻してくださいますが、主との関係が希薄になっているので、それを主のために何かを行おうと行動に駆られています。

これは、知識がなく熱心になっているだけです。御霊に留まるのではなく、肉によって動いてしまっているのです。自分が何かをしないといけないという焦燥感があって、活発に動いていますが、主との交わりから出ていません。

### 4A 遠くから付いて行くペテロ

#### 1B 中途半端な献身

そして、イエス様が捕えられました。ペテロは、確かに付いて行っています。ところが、遠くからついていっているのです。それが今朝の本文です、「54 ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の庭の中にまで入って行った。そして、下役たちと一緒に座って、火に当たっていた。」イエス様について行けば、何とかなるのだと私たちは思ってしまう。けれども、距離を置いてイエス様について行けば、自分を危険なところに置いています。教会に来るけれども、時々でいいだ

ろう。献金も適当にしておけば、何とかなるだろう。祈りも、緊急の時だけ祈っているようになってしまっている、など。イエス様にはついて行こうとしているのですが、心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして主なる神を愛していないということです。

## 2B 敵の焚火

そして最後です。「14:54 下役たちと一緒に座って、火に当たっていた。」ペテロはついに、イエス様の敵と一緒に火に当たっていました。自分が、主と遠くになってしまったら、その空白を補うために敵の暖かさまでを楽しもうとしてしまいます。主がやってはいけないと言われることも、その失ってしまった温かみ、関係がないので、それで行ってしまうのです。敵陣のほうで自分を楽ませるしてしまうのです。

何が主にあって、何が敵なのか？「ガラ 5:19-23 肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです。以前にも言ったように、今もあなたがたにあらかじめ言うておきます。このようなことをしている者たちは神の国を相続できません。しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。」この肉の業が明らかな時、私たちは敵陣の火をもてあそんでいます。けれども、主の傍にいる時には、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制を見ることができます。

自分はそうならない、と思っているところから始まりました。自分をまだ生かすことができるのだ、十字架についていない、というところから始まりました。

## 5A 悔い改めの一步

ここで最後、慰めがあります。私たちも、主に対して本当に熱心に仕えていて、けれども、あまりにもかけ離れたことを行ってしまった、大失敗をしてしまった。けれども、どんなに遠くにイエス様から離れてしまっていたとしても、それでも悔い改めはたった一步です。主に立ち戻るのは、本当に一步であります。

ダビデが、ペリシテ人のアキシュの下に仕えて、敵陣のところいてサウルから我が身を守りました。そしてダビデは、さすがにユダヤ人を殺すことはありませんでしたが、代わりに「ゲゼル人、ゲゼル人、アマレク人を襲った（Iサム 27:8）」とあります。そして、男も女も生かさず、その家畜などをアキシュの下に持って行ったのです。そしてユダヤ人の町々を襲ったと偽ったのです。もし、アキシュに言いつける者がいたら大変なので、一人も残らず殺しました。虐殺です。

けれども、彼らが家を空けているうちに、彼らの住んでいたツィケラグの町をアマレク人が遅い、女も子供もすべて誘拐しました。みな声上げて泣き、ついには泣く力もなくなりました。そして、

ダビデを石で打ち殺そうと言い出した兵士たちまで現れました。彼は行くところまで行ってしまったのです。しかし、「Iサム 30:6 ダビデは自分の神、主によって奮い立った。」とあります。これだけでした。そこから、ダビデは主に伺いを立てました。今でいうなら祈り始めたのです。そして兵士たちと共にエジプトに行き、アマレク人たちを見つけ、全ての女子供を奪い返し、また多くの分捕り物も与えられました。しかもダビデは、途中で挫折してしまった兵士たちにも、等しく分捕り物を分け与えました。こうして、彼はただ「主に奮い立った」ということだけで、以前の、恵みに満ちた働きをすることができたのです。

神はすぐそばにおられます。自分は遠く離れていると思っても、どんなにもう遅いと思っても、立ち直る道は目の前にあります。